

2017
おもろ
チャレンジ

Risk Factors of Low Back Pain and the Relationship with Pelvic Angle in Tanzania

医学研究科 修士課程 1年

辰巳 昌嵩

タンザニア

2017年9月20日-

2017年12月22日



渡航概要と内容

(経過と成果)

- ①NIMR Tanzania (Ethics Committee/倫理委員会) への訪問と申請
- ②日本大使館への表敬訪問 + JICA タンザニア所長に謁見
- ③NIMR Tanzania (Ethics Committee/倫理委員会) の認可取得
- ④COSTECH(Survey permission/調査許可委員)の申請を委託
- ⑤Immigration(Residence permit/入国管理局)へ登録と在留ビザ切替を委託
- ⑥現地協定大学(Kilimanjaro Christian Medical Centre/KCMC)及び大学病院のスタッフ、学生の身体測定を実施
- ⑦KCMCにてセミナーを開催

(倫理審査委員会) 医療分野での研究のため、調査許可機関の認可申請には倫理審査委員会からの承認が必要である。入学前に一度訪問し、連絡先を交換した後に E-mail での挨拶も交わしていたが、申請に関する日本国内からの問い合わせに返事が来ることはなかった。そのため、タンザニア入国翌日より再度直接倫理審査委員会の事務所に訪問し、申請書類の確認を行った。その際、前回訪問時に得た情報に従いホームページに記載されている書類を全て持参していたが、記載されていた以外の書類も必要であることや、審査料の支払いは銀行振込みのみであるなどの新しい情報が再訪問の場で告げられた。また、申請書類は全て印刷する必要があり、且つ5部の複製を行った後に、全てのコピーを現地文房具店に委託して製本する必要があることも新情報として得た。これは、メールでの問い合わせに応じない状況に加え、対応する人物が訪問の度に異なり複数回直接訪問しなければ発覚し得ない内容が存在するなど、機関自体の組織的な問題が申請者に負担を強めている現状であることを知る機会となった。その後、調査フィールド到着からは現

地大学機関の教員を通してメールでのやり取りが可能となったが、この委員会からのコメントに従った申請書類の修正の度に、再印刷と製本及び郵送が要求され、認可を遅らせる大きな原因にもなった。最終的に、修正資料と追加資料で合計3回の製本した書類の提出を経て、承認までに3ヶ月の時間を要した。

（調査許可委員）倫理委員会の許可がなければ調査許可申請自体が行えないとされていた。そのため、倫理委員会の承認証の写しと共に、現地申請の委託請負を行っている日本企業に手数料と共に書類を託すことで、次回の調査訪問へと繋ぐこととした。

（入国管理局）観光ビザから調査ビザに切り替える必要があるが、倫理審査委員会及び調査許可委員会からの許可がなければ、申請書類自体が提出できない。しかしながら、2年前の政権交代後、外国人滞在者への規制が厳しくなり、情報漏洩により滞在先に管理局職員が監査に現れた。尋問を受けた為、観光ビザで入国し調査ビザの切り替え待ちであることを伝えたが、研究協力者である現地教員が入国管理局まで出頭するよう要求される事態となった。現地教員が入国管理局で事情聴取を受けたところ、今回のケースであれば就労ビザで入国するべきだという指導を受けて解放された。就労ではない為今回の指導は理解し難いが、出頭要請までして問題なしでは面目が立たないという理由からの苦し紛れの指導であった印象である。

今回は、現地協力者の助力により自身は拘束されることは無かったが、近年はパスポートの不携帯やビザ関係で身柄拘束まで至るケースも度々耳にする。その背景には、課せられる罰金とそこから捻出される情報提供者への報奨金制度があることを知った。その為、情報を売ろうとする悪質な現地住民やホテル従業員も存在する為、滞在者は十分に注意する必要がある。



現地の協力大学
Kilimanjaro Christian Medical Centre (KCMC)

（現地教員）共同研究者でもある現地教員（校長）は協力的ではあるものの、本来の業務に加えて、突然の予定変更や長期の出張、体調不良や突然の休暇など予想が難しいスケジュール変更が日常的である。そのため、現地教員を通して作成する書類に関して長期の時間を必要とし、倫理委員会からの要求への対応は1~2週間単位の時間を要した。個人的には、タンザニア人と共同した作業としては早い方であったと感じる。



現地大学の校長

（調査場所）共同研究者が校長を務める、理学療法士養成課程のある大学病院（KCMC）の大学の空き教室の一室を終日借りることが出来た。

（測定補助）学生は被験対象であると共に、測定補助員としても採用を実施。現地の養成校は座学が大半を占め、学んだ内容を実施する機会が少ない為、測定補助を行う形式を取ることで実技経験と実技の直接指導を担えた。また、被験者と測定補助の双方の交友関係から新規の協力者を集めることが出来た。

（被験者リクルート）被験者リクルートは、まず現地教員を対象に測定を開始。その後、被験してもらった現地教員から授業中に生徒へ向けて研究の説明と協力要請を出して貰う。そして、被験で来た学生の交友関係から他の協力者を集めた。また、自身の所属する研究室が地域活動として定期的に行っている多重処理能力訓練のトレーニングセミナーを現地でも開催することで、日本から来ている理学療法士という認知度の向上を図るとともに、参加者に対しての被験の広報と依頼を継続した。

（病院施設）調査フィールドが病院併設機関であることから、病院の腰痛外来患者もデータ収集対象であった。実際に計測場所や被験者のリクルート頂くリハビリテーション科は大いに歓迎してくれた。しかしながら、調査許可が得られていないことから病院長の許可が得られず、接見の予約時間にオフィスを訪問したとしても不在であるなど帰国までには結局会うことが叶わなかった。次回は、調査許可と共に直接の協力依頼を行なう。

（トラブル①:マラリアの罹患）入国から8日目に発熱、直ちに医療機関を受診し「扁桃腺炎」と診断され解熱薬と抗生剤を処方される。5日間滞在先で服薬を続けて療養するも症状改善せず衰弱の進行を感じた為に再受診し、再々診にて血中のマラリア原虫を発見される。マラリア発覚と同時に抗マラリア薬の投薬治療が開始され徐々に回復。治療開始から6日後には調査開始を行ったが、大幅な体力低下を起こしており調査開始に支障をきたした。全快までに3~4週間を要



学生への測定補助依頼と実技指導



脊柱の彎曲を測定して、程度を数値化



被験者リクルート兼トレーニングのセミナーを実施

した。

（トラブル②：学期始まりの遅延）学生も被験対象だが、学期始まりの時期に授業料の未払いなどにより大半の学生が揃わずに、学期始まりが一週間後ろ倒しとなり、被験者の獲得が遅れた。

（トラブル③：泥棒）滞在中、校長室の鉄柵が夜間に破壊され、夜間泥棒が入ったことで授業の停止などの混乱が起こったことで、より一層現地教員と共同して作成する書類の完成が遅れた。

（トラブル④：授業の休校）学期末に近づくとつれ、担当教員が来ない、長時間の停電等の理由で休校状態となっているクラスがしばしばあった。重なる休校などから、学校内に留まり自習している学生も次第に減り、被験者リクルートに支障をきたした。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

海外をフィールドとした研究には現地の認可申請が不可欠である。また、文化的な背景を考慮し、安全に調査を実施する為にも、現地事情に精通した現地の協力者によるサポートが重要であることを再認識できた。

この公的機関を介する手続きだが、特に開発途上国においては、公式機関であったとしてもマニュアル整備、システム化が成されていない場合が多い。その為、対応した職員によって説明や要求してくる書類が異なるなどのトラブルが日常的に起こる。また、申請後数ヶ月経過してから、書類が紛失したから再提出といったケースも少なくない。システムエラーや人的ミスが日常的に発生しており、手続きが遅延することが通念となっている。他にも、決まった様式が指定されていない書類であっても、認可機関が好む体裁があることや、書類作成の暗黙のルールなどが多く存在するなどの情報が、現地教員からの聴取にて得られた。

滞在許可証に関しても、入国管理局の規制強化が近年のタンザニアで目立つ。今後、タンザニアにて調査を実施する予定の人は、現地の状況に精通した人物である、若しくは協力者がいなければリスクが高くなっていくように思う。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

大幅な予定の後ろ倒しや変更が余儀無くされ、開発途上国を対象にした公式な活動は年単位の長期の時間を要し、計画は現場の状況で適宜修正することを前提に柔軟性を持たせて作成する必要があると再認識した。今回、現地認可機関を訪問し複数の職員とやり取りを重ねたことや、現地の協力者のサポートや指導を貰うことで、タンザニアにおける医学分野での研究を始める上での基盤作りのノウハウを学ぶことが出来た。

今回、認可機関の問題から多くの作業と時間を要したことにより、当初予定していた研究対象のデータ収集は十分に達成することは出来なかったが、それらの作業を通し、現地での調査の進め方を体験しながら実践的な学びや、多くの現地協力者からのサポートを得ることが出来、帰国までに倫理委員の承認まで漕ぎ着けた。今回の滞在は、少なくはない想定外やトラブルに遭遇し、その都度の計画変更を余儀無くされてはいたものの、タンザニアにおいて今後も調査を進めていく為の協力者や調査協力地が得られ、次回以降の調査訪問を実施することを前提とした足場作りとしての成果は充分にあったと考えられる。よって、修士2年目には、さらに現場に根ざし

た調査を実施していく足掛かりとして十分な結果を得られた。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

開発途上国を対象とした介入をする場合、一言で表現するならば「こんなことはまさか起こらないだろうと思ったことが実際に起こる」環境です。

本プログラムが推奨する「おもしろ」なチャレンジで、現地でたくさんの”あり得ない”ことが経験出来る支援形態のプログラムであるように思う。自分の興味関心をぶつける機会にもってこいのプログラムです。

■ 主な奨学金の使途

*ビザ

*予防接種

*機材費

*交通費

*現地協力者への謝礼 など